

偽書『朱子四書或問小註』とその影響について

The False Minor Annotations on Master Zhu's

Sishu Huowen and its Influence

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

ABSTRACT

This essay is a study of *Minor Annotations on Master Zhu's "Sishu Huowen."* Fundamentally, this essay seeks to show how, in the late Ming period, a preface and letters falsely attributed to Zhu Xi were appended to *Minor Annotations on "Huowen"*—a reference book that was prepared for examination candidates—and published under the title *Minor Annotations on Master Zhu's "Sishu Huowen,"* and how by the mid-Qing period, as a result of its forced promulgation by Jiangnan Provincial Education Commissioners, this book exerted a definite influence on examination candidates of the time.

はじめに

『朱子四書或問小註』は、「其れ近人の依託と爲ること疑い無し」（『四庫全書總目提要』卷三十七・經部三十七・四書類存目・「或問小註三十六卷」条）といわれるように、朱子に名を借りた偽書であろう。

もともとこの書物は、陸隴其（初名は龍其、後に隴其に改める。字は稼書、諡は清獻。浙江平湖の人。明・崇禎三年十月十八日〔一六三〇年十一月二十一日〕～康熙三十一年十二月二十七日〔一六九三年二月一日〕。康熙九年庚戌科〔一六七〇〕二甲七名の進士の『四書講義困勉錄』（康熙三十八年〔一六九九〕序）の『論語』子路「子謂衛公子荆，善居室。始有，曰，苟合矣。少有，曰，

苟完矣。富有，曰，苟美矣」条に、『或問小註』⁽¹⁾として引用されるように、『四書』の解説書であった。

註は只だ主として「序に循いて、節有り」（朱注）を説く。然れども又た須く治家の能を補して説くべし。『[四書] 大全』に朱子の所謂ゆる「他人の居室 其の華麗を極めざれば、則ち全く理會せず」①と、『或問小註』の所謂ゆる「其の事を善くするに非ざれば、先を彌いよ光らす能わず」②なり。但だ重きは「序に循いて、節有り」（朱注）の邊に在り（『四書講義困勉錄』（康熙三十八年〔一六九九〕序）論語講義困勉錄卷十三・子路第十三・七葉～八葉）。

①『四書大全』に「問公子荆善居室也。無甚高處聖人稱善何也。朱子曰，常人居室不極其華麗，則牆傾壁倒全不理會……」（『四書大全』論語集註大全卷十三・子路第十三・「子謂衛公子荆，善室。始有，曰，苟合矣。少有，曰，苟完矣。富有，曰，苟美矣」条）。

②『朱子四書或問小註』に「胡氏曰，自合進而完，自完進而美，非善乎其事，不能彌光於先……」（康熙四十一年刻『朱子四書或問小註』子路第十三・八葉・「子謂衛公子荆章」条／康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』子路第十三・九葉・「子謂衛公子荆章」条）。

ただこの書は朱子に仮託されたことから，清の中期には，八股文を作成する人たちに影響をあたえることになる。そこで、『朱子四書或問小註』は何時ごろ現れ，誰によって顕彰され，どのようにして影響を与えたのかを以下で検討

(1) 陸隴其が引用するのは、『朱子四書或問小註』の康熙四十一年刻本・康熙六十一年刻本ともに割注の「胡氏曰」として引用されている箇所である。また，康熙四十一年に『朱子四書或問小註』を出版した陳彝則の，

〔陳彝則は以前〕諸家の講説を記すに因りて，嘗て『或問小註』を引述すること有るも，特に未だ其の全書を見ず（康熙四十一年刻『朱子四書或問小註』總目・二葉）。

という表現からすると，完本としては見られるものではなかったようである。すると，陸隴其は『四書或問小註』そのものを見ずに孫引きをしているのではないだろうか。

してみたい。

なお、拙稿で用いる『朱子四書或問小註』は、康熙四十一年（一七〇二）に陳彝則が明・徐方廣の本に基づき刊行したものと、康熙六十一年（一七二二）に江南學政の鄭任鑰が刊行したものとである。両者には異なる点が存在する。

康熙四十一年（一七〇二）に陳彝則が刊行したものには、徐方廣の序があり、竊議は雙行小字にして一格子を低くし、妄りに増註と曰う。蓋し張[拭]・陳[淳]・饒[魯]・輔[廣]諸先生の説を増註するなり（康熙四十一年『朱子四書或問小註』總目・二葉）。

という。一字下げて小字で二行にしているところが、徐方廣の増註であり、それは張拭・陳淳・饒魯・輔廣などの説を増補したものだという。

徐方廣の序では続けて次のようにいう。

集中の行歟の大字・雙行の一格を高くする者は、出るに朱子の原本による。悉く之に仍りて刻す。稿は凌義遠先生の家より借り來る。敢て由る所を忘れざるなり。内中 一格を低くする雙行の細字及び朱子の大小の字の旁に加える圈逗は係れ^こ（徐方廣）の増す所の者なり。後世の膽大にして妄りに作り妄りに爲すなり。凡そ以て僭と云うなり（康熙四十一年『朱子四書或問小註』總目・二葉）。

本文は稿本そのままにしたが、小字や句読点や圈点などは、徐方廣が加えたというのである。すると、康熙四十一年（一七〇二）刻本は、朱子の本文に徐方廣が句読点や圈点をつけ、一字下げて二行の小字で補注を加えたものに基づいたものであるといえる。

それに対して、康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』は、その「讀朱子四書或問小注法」に、

『[論孟]精義』・諸々の老先生の説の朱子の^す已經に參載する者は、並びに原本に依りて雙行頂格にして^か寫く。其の未だ參載せずして論説の及ぶ所有れば、則ち補いて句の下に附す。或いは已に『章句集注』に見ゆ、或いは論説する處 已に明らか、或いは緊要に關する無ければ、則ち復た補わず（康

熙六十一年刻『朱子四書或問小註』・「讀朱子四書或問小註法」・讀法一)。
とあるように、朱子が参考にした議論は、原本のとおり空格にはせず、小字二行割注の形で、それぞれの本文の後につけ、朱子が参考にはしていないものの関係する議論があれば、本文の後ろに補足を加えたという。なお、この補足の部分では、康熙四十一年陳彝則刻本にある明・徐方廣の増註の多くが削除され、いろいろな議論が付け加えられている。それが、王懋竑によって、

余（王懋竑） 念うに……又た近時の坊刻の諸講章に比べて少しく詳備すと為す（『題四書或問小注前』『白田草堂存稿』卷八・八葉）。

といわれたのではないだろうか。

また、「讀朱子四書或問小註法」では次のようにもいっている。

〔「與劉用之」書⁽²⁾〕 朱子 云う、舊刻を刪訂するもの十の五、と。即ち『或問』・『文集』・『語類』を指して言う。手訂を経るに縁るの故に或いは盡く原文を用う、或いは原文に於いて刪ること有り・増すこと有るを論ずる無く、總じて「刪定」の二字を以て之を槩す。茲れ其の盡く原文を用う者に於いては、則ち注に『或問』・『文集』・『語類』と云い、原文に刪る

(2) 劉礪の字は用之。福建福州長樂縣の人。田中謙二氏の『朱門弟子師事年攷』（『田中謙二著作集』第三卷・平成十三年・汲古書院刊）によると、劉礪は三次にわたって朱子に師事している。

(a) 紹熙元年（一一九〇）漳州にて。下限は翌年（一一九一）四月に及ぶ可能性がある。

(b) 慶元四年（一一九八）十一月二十四日から、翌年（一一九九）前半ころ。

(c) 慶元五年（一一九九）末から翌年（一二〇〇）二月まで。

また、「與劉用之」は、次のようなものである。

『大學』・『論語』・『中庸』・『孟子』 前の『章句集註』に照らし、分ちて三十六卷と爲す。門人の問答の未だ刊發を経ざる者は什の四、舊刻を刪訂するは什の五、『精義』を參載するは什の一なり。刻 將に半ばならんとするに池城 火毀す。蔡沈 復た其の事を董（はか）り、始めて竣成するを得（康熙六十一年刻は「能」に作る）。老年 益ます世人と交わるを喜ばず。而して人も亦た復た見過（來訪）せず。著書の外、頗る他の好み無きなり（康熙四十一年刻『朱子四書或問小註』總目・一葉／康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』總目・一葉）。

こと有り・増すこと有る者に於いては、乃ち「刪訂」二字を加う。讀者に一見して了然するを望むに非ざるは無し。且つ此れに従いて細かく刪訂する所以の意を求め、亦た力を爲し易きなり（康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』・「讀朱子四書或問小注法」・讀法一～讀法二）。

康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』において、『或問』・『文集』・『語類』の本文に増減を加えた箇所は、すべて「刪定」と記す。『或問』・『文集』・『語類』の本文をそのまま用いているものは、その箇所にそれぞれ「或問」・「文集」・「語類」と記す。そしてその箇所がどの書物からきたのかをはっきりさせ、なぜ朱子はその箇所を「刪訂」したのかを考えられるようにした、というのである。

このように、康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』は、明・徐方廣の増註の部分を八股文作成に有用な議論や鄭任鑰（恐らくは湯友信）の意見を載せたものに改め、それぞれの本文が朱子のどの著作に基づいたのかの出拠を示したという二点が、康熙四十一年刻『朱子四書或問小註』と大きく異なっているところである。なお、明・徐方廣の刊行した『朱子四書或問小註』については、いまのところ目睹しえない。

（一）

『朱子四書或問小註』は、明・徐方廣（字は思曠。江蘇太倉の人。明末の諸生⁽³⁾）によって出版された。ただし、朱彝尊（字は錫鬯，諡は。浙江秀水の人。明・崇禎二年〔一六二九年〕～康熙四十八年〔一七〇九年〕。康熙十八年己未科〔一六七九〕博學鴻儒の一等十七名の進士）の『經義考』には著録されていない⁽⁴⁾。

徐方廣の序文には次のようにある。

……竣（徐方廣）束髮して、書を受け、義理を講求してより、嘗て註に背くことを以てのみ是れ懼る。歳は壬午（萬曆十年〔一六四二〕／崇禎十五年〔一六四二〕）、下帷（家庭教師となる）する晨溪の凌氏の繪雪堂に是の書（『朱子四書或問小註』）を讀む（康熙四十一年刻『朱子四書或問小註』總目・

二葉)。

そして、

……稿は凌義遠先生の家より借り来る。敢て由る所を忘れざるなり……

(康熙四十一年刻『朱子四書或問小註』總目・二葉)。

とあることから、凌義遠のところにあった稿本『朱子四書或問小註』に基づいて出版したらしい。徐方廣の序文には、宋・元・明の人たちとこの朱子著『朱子四書或問小註』とのかかわりについてはまったく記されていないことから、明末に突然出現した書物であったと考えられる。しかし、陸隴其の『四書講義困勉錄』などにおける引用からすると、朱子の意見を取捨選択した受験参考書『或問小註』という書物そのものは以前から存在していた。恐らくその『或問小註』に朱子の書簡や「序文」が付け加わることで、朱子著『朱子四書或問小註』となったのではないだろうか。

✓ (3) 徐方廣の八股文について、俞長城の『可儀堂一百二十名家制義』で次のように言う。

楊子雲『法言』を作り、世知る者無し。桓譚曰く、後世楊子雲有れば、則ち子雲を知る、と。六代を歴て唐に至り、獨り昌黎(韓愈)子雲の文を嗜む。昌黎(韓愈)歿して昌黎(韓愈)の嗜みある者莫し。乃ち徐思曠(徐方廣)の制義、采は目を奪わず、聲は耳を悦ばさず。之を誦すれば、雪を含み梅を咀嚼が如く、寒香の氣心脾に沁み入る。此れ固より知るを爲し難き者なり。艾東郷(艾南英)深く思曠(徐方廣)の文を賞し、録入定待す。吾(俞長城)東郷(艾南英)の思曠(徐方廣)を知るを知らず。桓譚に較べて孰れが甚だしきや。數十年來、選者東郷(艾南英)に因りて思曠(徐方廣)の文を録すも、實は思曠(徐方廣)を知らず。苟し選者思曠(徐方廣)の文を嗜み、亦た昌黎(韓愈)の子雲を嗜むが如ければ、則ち其の文の昌黎(韓愈)ならざるを患わず。余(俞長城)故に詳しく思曠(徐方廣)の文を録し、以て天下の昌黎(韓愈)の嗜む者を嗜むを待つ(俞長城「題徐思曠稿」『可儀堂一百二十名家制義』卷之三十八・二葉～三葉・「徐思曠稿」条)。

なお、欽定の『四書文』にも徐方廣の八股文は採用されており、八股文作家としては、當時有名な人物であった。

✓ (4) 朱彝尊の『經義考』は乾隆二十年(一七五五)に刻されているが、康熙三十八年(一六九九)の陳廷敬の序文や康熙四十年(一七〇一)の毛奇齡の序文などがあることから、この頃にまとめられたようである。康熙四十一年(一七〇二年)に陳彝則によって『朱子四書或問小註』が改めて出版された前後のことである。

徐方廣が明末に出版した後、『朱子四書或問小註』は康熙四十一年（一七〇二年）に陳彝則によって改めて刊行された。刊行するに当たって陳彝則は、次のような序文を書いている。

往時、周龍客の刊する所の『朱子語類』・呂晚村（呂留良）の『論孟或問精義』を見るに、古今 未だ曾て有らざるを得るが如し。[そこで]『文集』・『語錄』・『續類』^{なら}並びに周[龍客]・呂[晚村]の兩家を合わせて、彙訂し以て備美（完備）を成さんと欲するを志す。適たま兒子の元燮（燮）の正續艾選（艾南英の八股文の選集）の役有り、尙お濡遲（遅れる）にして未だ能わず。丁丑（康熙三十六年〔一六九七〕）の春、白門（南京）を過ぎ、獨り千廊の下を行き、亂書を繙閱す、中に『朱子四書或問小註』の卷次 了然たる有り。其の後は則ち徐思曠（徐方廣：字は思曠）先生 之が叙を爲す有り。[陳彝則は]諸家の講説を記すに因りて、嘗て『或問小註』を引述する有るも、特に未だ其の全書を見ず。遂に衣を質^{かた}にし^{これ}焉に易え[て入手した]。篝燈して夜讀み、是れ『[四書]集註』以後の書の内に已に見ゆ・未だ見るを経ざる者の各々相い半ばする有るを知る。『語類』・『或問』諸書を隨覽（覓）し、勘對（校勘）すること宛如たり。予 向に備美（完備）なる者を成さんと欲し、[その]後に、徐[方廣]先生 參するに紫陽（朱子）よりして後に諸儒の説數を以てし、と并せて先生の眞知・獨見 實に朱子と相い表裏する有り[の『朱子四書或問小註』に出会った]。始め吾れ舉子の業を習いし時、海内に徐[方廣]先生有るを知るも、以て親炙するを得ざるを恨みと爲す。今、幸いに其の副墨を睹るに、則ち是れ朱子の一書にして、徐子の又た一書なり。一にして二、二にして一なり（康熙四十一年刻『朱子四書或問小註』總目・二葉～三葉）。

もともと陳彝則は、完備した朱子の著作集を編纂したいと考えていたところ、康熙三十六年（一六九七）春に白門（南京）で、徐方廣の序文のある『朱子四書或問小註』を見つけ出した。そもそも、陳彝則はこれまでの『或問小註』の解釈も引用したこともあった。しかし、その全文は見られなかった。いまその

『朱子四書或問小註』全文を読むと、『四書章句集註』以後の朱子の考えと同じものや同じでないものが、相い半ばしており、『語類』・『或問』などの書物を適切に処理してあったという。徐方廣については、八股文作者としての文名は聞いていたが、その薫陶を得られないのを悔やんでいた。いま、その八股文を見ると、朱子と同一化していることがわかったというのである。

ただし、この『朱子四書或問小註』を刊行しようとするのと非難されたが、完備した朱子の著作集を編纂したいという気持ちからこの書を出版するという。

去年の春、甫めて刊するを謀れば、忽ち同類が來りて譏りを貽る。復た三四月に淹^{いた}り、乃ち理に就くを得、此に則ち成る。余が向日の志にして、且つ徐〔方廣〕先生の未了の公案を完くせんとするなり。天なるや、人なるや。輯定する者は、男の元燮（燮）。校する者は、孫男の嘉穀。參定は、張子世榮なり。壬午正月人日（康熙四十一年一月七日〔西曆一七〇二年二月三日〕）、陳彝則 筆記す（康熙四十一年刻『朱子四書或問小註』總目・三葉）。

この序文では、意識的なのかどうか分からないが、陳彝則は『朱子四書或問小註』と『或問小註』とを使い分けている。康熙三十六年（一六九七）春に見つけ出したものが『朱子四書或問小註』であり、これまでいろいろな注釈書に引用されてきたのが『或問小註』であるとして区別したのであろうか。

徐方廣の『朱子四書或問小註』を見つけた陳彝則は、おそらく朱子の著作とするには、あまりにも疑わしいと批判をうけたものの新しく『朱子四書或問小註』を康熙四十一年に刊行する。ただこの書物が朱子の未発見の著述であるとして脚光を浴びた形跡はない。

ところが、康熙六十一年になって、江南學政の鄭任鑰⁽⁵⁾があらためて『朱子四書或問小註』を刊行し、注目されることになる。

そこで、まず、刊行するにあたっての鄭任鑰の序文を検討してみよう。

我が皇上 朱子を表章すること遠く前代に軼^すぐ。誠に〔以下のように〕。
 おもえ
 以らく。朱子 諸儒の大成を集め、以て上は孔・孟の傳に接す。凡そ論著

する所は動^{ややも}すれば理要（要旨）に關す。獨り『章句集注』に一字を添えんとせざるのみならず、一字を減ずるも得ざるなり。『或問小注』一書は、淳熙己酉（一一八九年）秋冬に成る。是の時、朱子は年 已に六十なり。『章句集注』・『或問』の外、學者の爲に一つの小注脚を添え、數月の間に舊きを訂し新しきを増し、數十萬言を襲積（積み重ねる）し、天理 斯に爛熟し極まれりと爲す。今、試みに『精義』・『或問』・『文集』・『語類』を取り、相い將に對勘（対照比較）せんとするに、其の同じき者は半ば、同じからざる者も半ばなり。之を總じて親しく整頓を加うるに、直ちに孔・曾・思・孟と一鼻息を同じくす。學に出入する者、深く理窟を探らんと欲するに、是の書を舍けば、何を以てせんや（康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』序一葉～序三葉）。

『或問小注』は朱子が六十歳のときに、『章句集注』・『或問』以外に、學者のために注釈をなそうとして、数ヶ月かけて作成した。『精義』・『或問』・『文集』・『語類』と比較対照してみると半分は同じで半分は異なるが、これを整理してみると、孔子・曾子・子思・孟子と考えが同じである。したがって、この『或問小注』をおいて、何を以て学問すべきだろうか、という。

そして、康熙五十九年〔一七二〇〕に江南學政に任命され、江南に正しい学問を薦めるという気持ちから、宛陵（安徽宣城）の湯友信に手伝わせてこの書

✓（5）鄭任鑰（字は惟啓。福建侯官の人）の職歴は以下のようになっている。

康熙四十五年丙戌科（一七〇六）二甲三十九名の進士

康熙四十五年（一七〇六）四月乙卯、特加簡閱で庶吉士

康熙四十八年（一七〇九）三月壬子 翰林院編修

康熙五十三年（一七一四）六月十六日 江西鄉試副考官

翰林院侍講：？～（五十七年十一月には翰林院侍講になっている）～康熙五十九年〔一七二〇〕三月一日

江南學政：康熙五十九年〔一七二〇〕三月一日～雍正元年〔一七二三〕三月二十二日

湖南布政使：雍正元年〔一七二三〕三月二十二日～〔一七二四〕十二月七日

湖北布政使：雍正元年〔一七二四〕十二月七日～雍正四年〔一七二六〕二月十二日

湖北巡撫：雍正四年〔一七二六〕二月十二日～雍正四年〔一七二六〕十月二十七日

都察院左副：雍正四年〔一七二六〕十月二十七日～雍正五年〔一七二六〕正月十八日

雍正五年〔一七二六〕正月十八日 革職

物を刊行したという。

余（鄭任鑰） 簡命（任命）を膺けてより江南を視學す（江南學政：康熙五十九年〔一七二〇〕三月一日～雍正元年〔一七二三〕三月二十二日在任）。江南は人文の淵藪なり。思うに華を黜け實を崇び、士子に進めるに讀書窮理の功を以てせんと欲す。困りて是の書を取りて重ねて校訂を加え、劄劄氏に付す。且つ海内の士の正學に志す者有れば、皆な此れを得、心を盡さんしめんと欲す。〔江南學政として鄭任鑰は〕惟だ是れ課士するのみにして、匆促に暇晷（暇なとき）多きは無し。校訂 已に一載を踰え、敢て一字の僞有らずと雖も、而れども前輩の以て朱子を發明するに足る者に於いては、收取する所多くする能わず、俗下の繆解も亦た僅僅に其の尤も甚だしき者を摘るのみ。宛陵（安徽宣城）の湯生（湯友信）素より朱子の書に潛心す。嘗て之と商確するに、彼 以爲らく但だ人人をして朱子の說に従事せしむれば、則ち理の明らかなるを見て言の審なるを擇び、自から美なる者は收むるに勝えず（収めきれない）、疵ある者は摘を待たず（摘出しきれない）、と。爰に其の端を發して多士の勗と爲す。康熙六十一年、歲は壬寅三月初一日に在り。候官の鄭任鑰 皖城試院に書す（康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』序三葉～序五葉）。

ただ、「人文の淵藪」である江南で、当地の學問を取り仕切る學政である鄭任鑰が、作者に問題のあるこの書物を刊行して配布することには、ためらいがあったものか、「後序」が附せられ、次のような考証が述べられる。もっとも王懋竑によれば、この「後序」は湯友信がかかわっていたようである。

「後序」では、次のように述べる。

或るひと余（鄭任鑰）に問う有りて曰く、是の書は朱子の作る所と謂うも疑い有るを免れず、と。余（鄭任鑰）之に應じて曰く、疑う可き無きなり。余（鄭任鑰）始めて是の書を聞きて、亦た嘗て之を疑いて、『或問』中の雙行の細字なる者は是れ小註なるのみ、何に縁りて別に『或問小注』一書有らん、と謂う。〔しかし〕其の原序を讀むに及びて便ち驚歎し以て

朱子に非ざれば作る能わずと爲す(康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』後序一)。

『或問小註』を朱子の著述とするのは、疑わしいのではないかという問いに対して、鄭任鑰も、最初は『或問』の雙行の細字になっているところが「小註」であるのに、どうして別に『或問小註』という書物があるのかと疑わしく思ったという。しかし、その疑問は『朱子四書或問小註』に附された「大學或問小註序」・「論語或問小註序」・「中庸或問小註序」・「孟子或問小註序」を読んで朱子でなければこのように書けないと思うようになったという。

また、朱子の年譜には『或問小註』のことが記載されておらず、『文集』には序文と「與劉用之」の書簡が収められていないことから、疑いを抱いた。しかし、『或問小註』を読んで、『或問』・『語類』などの内容と相い半ばし、同じものも一・二割は手が加えてあり、これらを読むたびに驚嘆し、朱子でなければ作ることにはできないと確信するようになった。そこからしてみると、年譜と『文集』とに『或問小註』のことが記載されていないことは、『文集』を編纂したときの遺漏であったのだという。

然り而して之を年譜に按ずれば、則ち年譜には此の書名無し。之を『文集』に考うれば、則ち卷の七十五・七十六には此の序文四篇(大學或問小註序・論語或問小註序・中庸或問小註序・孟子或問小註序)無し。卷の三十より六十四に至るまで此の「與劉用之」一書無し。又た竊かに之を疑う。既にして循次(順次)『朱子四書或問小註』を詳玩(玩味)し、叅するに『或問』・『語類』等の書を以てするに、其の同じき者は半ば、同じからざる者も半ばなり。即ち其の同じき者も亦た其の十の一二を刪潤(改めて潤色)す。毎に一條を読むに歎美に勝えず。乃ち始めて確然と深く此の書は朱子に非ざれば斷じて作る能わずと信ずるなり。因りて思うに年譜に此の書名無き者は、何ぞや。其の『章句集注』に附して行なわるるを以てなり。且つ朱子の書の名の亦た未だ年譜に見えざる者有り。獨り此の書のみならず、未だ以て疑いを爲す可からざるなり。『文集』に此の序と書無き者は、則ち

書を編する者の缺なり（康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』後序一）。

では、どうして『文集』に遺漏がでたのかというと、偽學の禁で朱子の著作が流通しなくなったためである。朱子の『論孟精義』は名前が変化している。『或問小註』もこうしたことを参考にして理解すべきである。当時、劉用之（劉礪）や蔡九峰（蔡沈）が朱子の著述を編纂したなら、「或問小註序」や「與劉用之」の書簡などは必ず収められ、『朱子語類』も所見・所聞の異同がなかったであろうという。

然れども亦た故有り。丙辰の偽學を嚴禁するの日に當りて、其の勢い洶洶として幾んど免れざるに至る。^す業已に其の刊する所の『集注』の板を盡く毀ち、民間 隻字も留めるを許さず。四年を閲て、朱子 卒す。幸いに「中庸序」を以て身後（死後）の賞に邀^あい、乃ち始めて其の遺書を購うに、先後錯出す。故に其の門人・嗣子の輩は、各々見る所を識（記載）し、各々聞く所を述べ、一時の搜羅の遺すこと無き能わず。嘗て孔子の言語の『大學』・『中庸』・『孟子』以て漢の世に及びて稱引する所を見るに、往往として『論語』の未だ記すに及ばざる所と爲るを觀る。而して又た何ぞ朱子に於いて獨り此れならざるを疑わんや。朱子の程・張諸先生の説を編次して、初めは「[論孟] 精義」と名づけ、改めて「集義」と名づく。又た其の時に遺脱する所有るを以て重ねて補塞を加え、名を「要義」に定む。今、[呂留良の] 天蓋樓の印行する本子に「精義」有りて、「要義」無し。倘し藏書家 之れ有りて「[論孟] 精義」は眞にして「要義」は偽なりと謂うを得んや。『或問小注』 其れ亦た以て例として觀る可し。故に當日の劉用之（劉礪）をして『文集』を編せしむれば、則ち朱子の與^{あた}うる所の此の書は必ず載入す。蔡九峰（蔡沈：乾道三年〔一一六七〕～紹定三年〔一二三〇〕）をして『文集』・『語類』を編せしむれば、則ち惟だ此の「序文」と「書」とを載せざるのみならず、并せて池[州刊・李道傳編『朱子語錄』]・饒[州刊・李性傳編『朱子語續錄』]／蔡抗編『朱子語後錄』・徽[州刊・王伋編『朱子語續類』]・蜀（眉州）[刊・黃士毅編『朱子語類』]・

建[州刊・呉堅編『朱子語別録』]の録する所も亦た必ず朱子の手訂する者を奉じて以て折衷を爲し、所見の異辭・所聞の異辭無し（康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』後序一～後序二）。

『四書大全』に引用される朱子の説のうち『文集』・『語類』からのものについては、どこからのものかは理解できているが、『文集』・『語類』に見当たらないものについては、『或問小註』からであることが分かっていない。また、『四書大全』は『文集』・『語類』を改変して引用するが、意味が通らないところがある。それは、元・倪士毅の『四書輯釋』によっているからである。意味の通ずるところは、すべて『或問小註』における『文集』・『語類』の改変と合致する。そこから、『四書大全』成立以前に、『或問小註』を見ていたものがあることがわかる。さらに、明・蔡清（字は介夫、号は虚齋、諡は文莊。福建晉江の人。景泰四年〔一四五三〕～正徳三年〔一五〇八〕。成化二十年甲辰科〔一四八四〕二甲七十三名の進士）の『四書蒙引』に『或問』を引用しているところがあるが、『或問』には見当たらず、『或問小註』にある。これは、「或問」に下の「小註」が抜けてしまったのであろう。ここから蔡清が『或問小註』を見ていたことがわかる、とする。

況んや『四書大全』内に朱子を引く者は、人止だ『文集』・『語類』に出ずるを知るのみ。其の『文集』・『語類』の無き所の者は、出ずるに何れの書よりするか、人知らざるなり。『或問小註』を讀みて始めて復た此に出ずるを知る。又た『四書大全』は『文集』・『語類』を引くと雖も、然れども或いは分かつ者は之を合わせ、合う者は之を分かつ。一章の中、一二句を改む・一句の中、一二字を改むるの其の通ぜざる者は則ち『[四書]輯釋』の陋を襲用するなり。其の通ずる者は則ち必ず『或問小註』と合す。『[四書]大全』以前に已に此の書を見る者有るを知る可きなり。[明・蔡清の]『[四書]蒙引』（卷十二「欲其自得之也」条に「論自得者、可把牝鷄抱卵出雛爲譬、『或問』朱子曰、少時見鷄將出卵、視之其時已至、自然迸裂而出、全不迸彼着力、有時見其難、稍以手助之、其子出來便不長進、學而進於自

得者、其理正如此……)の説の『或問小註』と同じき者有り。未だ嘗て其の自る所を言わずと雖も、「君子深造之以道」(『孟子』離婁下)章の「雛將出卵」の譬えは則ち之を『或問』に係ぐ。今、『或問』を按ずるに此の説無し。惟だ『或問小註』のみ之れ有り(康熙四十一年刻『朱子四書或問小註』孟子卷八・十四葉・「君子深造章」条／康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』離婁下・十四葉・「君子深造章」条)。自ずから是れ『或問』の下「小註」二字を脱却す。是れ『蒙引』又た已に此の書を見るなり。惟だ是れ『或問小註』の名と『或問』と相い似たり、一なり。『大全』の小注と相い似たり、二なり。『或問』中の雙行小注と相い似たり、三なり。細心なる者は少なし。率筆なる者は多し。抑そも或いは此の書を見る者は尙お少きを以て、其の尤なるを襲いし者は掩いて己が有と爲す。是を以て遞傳し、自り來る所を忘るのみ(康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』後序二～序三)。

また、南宋の朱子の著作である『或問小註』になぜ時文(八股文)作成についての解説が散在するのかについては、朱子も『文集』・『語類』でたびたび時文(八股文)作成について言及していると述べる。

或いは又た曰く、是れ固より然り。第だ書中に何ぞ間に時文の法を講ずるに似たる有りや、と。曰く、制義は王荊公(王安石)に始まる。朱子は十九歳に曾て進士に擧げらる。何ぞ時文の法を曉らざるを得んや。『文集』の中の「答蔡季通」(卷四十四)を考うるに、深く兒輩の作文を慮りて、更に向背往來の勢い無し。其の「學校貢舉私議」(卷六十九)に分年考試の法もて諸經は皆な『大學』・『論語』・『中庸』・『孟子』を兼ね、主司は宜しく如何に命題すべく、士子は宜しく如何に義を作るべきか、俱に詳しく論説有り。『語類』の載せる所に至りては、「時文を作るが如くする不消(必要はない)。兩句に著け來りて包説するを要す(不消如作(『語類』作「做」)時文。要著兩句來包説)」(『朱子語類』卷二十一・論語三・學而篇中)と云うが如し。又た説う「[譚兄]時文を作るを[問う]。曰く、略ぼ

體式を用いて櫟括し以て理に至る（〔譚兄問〕作時文，曰，略用體式而櫟括以至理）（『朱子語類』卷十三・學七・力行）。又た曰く「是れ科舉の人を累するに非ず，自ら是れ人科舉に累せらる。若し高見遠識之士の聖賢の書を読み，吾の見る所に據りて文を爲し以て之に應じ，得失・利害之を度外に置けば，日日應舉すと雖も，亦た累せられざるなり。今の世に居りて，孔子をして復た生れしむれば，也た應舉を免れず。然れども豈に能く孔子を累せんや（非是科舉累人，自是人累科舉。若高見遠識之士，讀聖賢〔之〕書，據吾所見而爲文以應之，得失利害置之度外，雖日日應舉，亦不累也。居今之世，使孔子復生，也不免應舉，然豈能累孔子耶）」（『朱子語類』卷十三・學七・力行）。此れより之を觀れば，即ち時に時文の法を講ずる有り。何ぞ嫌わんや，何ぞ碍^{さまた}げんや。然らば此の書實に是れ書旨より説きて書法に到り，學者一字も忽略する可からざるの意を示すに非ざるは無し。是れ作文家の爲に法門を開くに非ず。君等自ら時文を作るの心眼

（6）徐方廣の序文には、

歳は癸未三月晦日に在り。高沙の後學徐竣，今の名は方廣之を紙尾に記す（康熙四十一年『朱子四書或問小註』總目・一葉～二葉）。

とあるのみで，この「癸未」が何年を指すのかは明確ではない。

鄭任鑰の後序は，康熙六十一年（一七二二）に書かれているので，百四十年前の癸未は，萬曆十一年（一五八三）となる。

ただ，王步青（字は罕皆，号は已山。江蘇金壇の人。康熙十一年〔一六七二〕～乾隆十六年〔一七五一〕。雍正元年〔一七二三年〕癸卯恩科三甲八十六名の進士）によると，……先生（徐思曠）萬曆の中晩より已に文望を負い，天〔啓〕・崇〔禎〕の兩朝をへて，望益々高し……（『題徐思曠先生文鈔』『已山先生別集』卷之一・天崇十家文鈔序 題徐思曠先生文鈔 十家之一・三葉）。

とあり，萬曆といっても中晩期から天啓・崇禎年間に活躍したとする。また，俞長城（字は寧世，号は碩園。浙江桐鄉の人。康熙二十四年〔一六八五〕乙丑科三甲五名の進士）の『可儀堂一百二十名家制義』は，徐方廣を崇禎年間に分類する。さらに，梁章鉅（字は閔中，又の字を荳林。号は荳鄰，晩年に退庵と号す。福建長樂の人。乾隆四十年〔一七七五〕～道光二十九年〔一八四九〕。嘉慶七年壬戌科〔一八〇二〕，二甲九名の進士）の『制義叢話』題名には、

徐方廣 字は思曠，太倉の人。崇禎年間の諸生。『徐思曠稿』有り（『制義叢話』題名・八葉・「崇禎間」条）。

とある。王步青・俞長城・梁章鉅にしたがうと，崇禎十六年（一六四三）になる。

を以て是の書（『朱子四書或問小註』）を読む。故に此の嫌疑多し。今、陳彝則 是の書（『朱子四書或問小註』）を重刻するは、二十年を前にするの壬午（康熙四十一年〔一七〇二〕）に在りと雖も、而れども徐思曠（徐方廣）の是の書に増注するは已に百四十年を前にするの癸未⁽⁶⁾に在り。且つ〔徐〕思曠の増注は已に是れ重刻なり。其の原本は晨溪の凌氏の家より借り来る。然らば則ち向に是の書を見る者は尙お少なし。是の書有るを知らざるの故なり。苟し其れ之を知れば、人 一冊を置きて以て快しと爲さざる者有らんや。余（鄭任鑰）束髮（年少の頃）に書を受けて、紫陽（朱子）を瓣香（敬仰）すること已に久し。今、忝なくも學政を司どり、尤も斯文を興起するの責有り。江を渡りてより以來、幸いに是の書を得、因りて急ぎて之を表す。學ぶ者 其れ心を盡せ。

瓶城の學人 鄭任鑰 又た書す（康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』後序三～序四）。

康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』「後序」では、朱子の著作であると証明するために、

①年譜や朱子の『文集』になぜ『或問小註』のことが記されていないのか。

②『四書大全』や明・蔡清の『四書蒙引』なども『或問小註』を参照していた。

③なぜ時文（八股文）作成の説明があるのか。

の三点について説明されている。

こうした弁明にたいして、後の『四庫全書總目提要』では、次のように述べて批判する。

舊本「朱子撰」と題す①。宋以來、諸家の書目 皆な著録せず。諸儒の朱子の學を傳うる者も亦た一人りの之に言及する無し。康熙壬午（康熙四十一年〔一七〇二〕）に始めて陳彝則の家刻本有りて、明の徐方廣の増注する所と稱す。越えて二十年の壬寅（康熙六十一年〔一七二二〕）に鄭任

鑰 又た重刻を爲し、附するに己が説を以てし、併せて後序を作り、反覆力辨し、信に朱子の書と爲す。卷首に載す「朱子與劉用之書」及び序四篇の『晦菴集』中に載せざるが如きは、則ち以爲らく『〔晦菴〕集』中 偶々佚すと。年譜に此の書を作るを記さざるは、則ち以爲らく年譜の遺漏と。書中 多く時文の作法を講ずるは、則ち以爲らく制義は王安石に始まり、朱子は亦た十九にして進士に擧げらるれば、必ず時文を善くすと。連篇累牘(多くの文字)にして、強詞を以て理を奪わんと欲す。『中庸』の「其至矣乎」(第三章)の一節・「道之不行也」(第四章第一節)の一節を解するが如きに至りては、皆な『四書大全』所載の雙峯饒(饒魯)氏を剽す。「射有似乎君子」(『中庸』第十四章第五節)の一節は、全く『四書大全』所載の新安陳氏の語を剽す。僞蹟 昭然たり。[しかし] 萬難に喙を置きて、則ち以爲らく『〔四書〕大全』 誤りて姓氏を題すと。其の偏執 殆ど與に辨ずるに足らず。又た既に此の書は『〔四書〕集註』の後に作らると稱す。而るに『孟子』の「萬物皆備於我矣」(盡心上)一章の乃ち第三條の下に於いて附記して曰く、「此の條は係れ『語類』の説、第八條は係れ『或問』の説」(康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』盡心章句上・九葉・「萬物皆備於我章」条)、と。前輩 多く疑いて此れ未完の説の『〔四書〕集註』の前に在りと爲す。信なるかな、是の『小註』又た『〔四書〕集註』の前に在るを。亦た自ずから相い牴牾せざるや。載せる所の「中庸原序」に「淳熙己酉冬十月壬申」と稱す。『宋史』孝宗本紀を考えるに、是の月は庚子・壬寅の二日あり。庚子をして朔と爲さしめば、則ち下 推して三十二日を壬申と爲す。壬寅をして朔と爲さしめば、則ち上 推して三十一日を壬申と爲す。均しく十月に在るを得ず。『文獻通考』に載せる朱子の言に曰く、『〔四書〕集註』 後來の改定する處多く、遂に『或問』と相い應ぜず。又た工夫の修得無し云云(『文獻通考』卷一百八十四・經籍考十一・「論語或問十卷」条)、と。是れ『或問』 尙お未だ改めるに暇あらず、何ぞ又た『小註』を作るに暇あらん。陳振孫の『書錄解題』に又た曰く、「『論語通輯』十卷。黃幹撰。

其の書兼ねて『或問』を載す。婦^{ママ}(晦)翁の未だ盡さざるの意を發明す」(『直齋書錄解題』卷三・語孟類), と。朱子をして果たして此の書有らしめば, [黃] 幹 亦た何ぞ發明せんや。其れ近人の依託と爲ること疑い無し。王懋竑の『白田[草堂]雜著』に是の書の跋有り。[鄭] 任鑰 是の書を刻するの後, 自ら其の謬を知り, 深く湯友信の賣る所と爲るを悔やむと稱し, 併せて序及び諸論は皆な[湯] 友信の筆なり, [鄭] 任鑰 未だ嘗て寓目せず云々と稱す(『四庫全書總目提要』卷三十七・經部三十七・四書類存目・「或問小註三十六卷 安徽巡撫採進本」条)。

- ①『四庫全書總目提要』凡例に, 「大抵 灼として原帙を爲す者は, 題に「某代某人撰」と曰い, 灼として贋造と爲る者は, 題に「舊本題 某代某人撰」と曰う」。

『四庫全書總目提要』において四庫館臣は, 宋以来の書目に著録されておらず, また朱子学の傳承者もこの書物に言及したものはいないとして, 以下のように批判する。

- ①『朱子四書或問小註』に附された「與劉用之」書と四篇の序文が, 朱子の『文集』にないのは, たまたま佚しただけであるということは, 「其の偏執 殆ど與に辨ずるに足らず」。
- ②朱子の年譜に『朱子四書或問小註』のことが記載されていないのは, 年譜の遺漏であるということも, 「其の偏執 殆ど與に辨ずるに足らず」。

(7)「安徽巡撫採進本」とのみあるが, 『四庫全書總目提要』で, 康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』に附された鄭任鑰の「後序」を批判し, また,

『孟子』の「萬物皆備於我矣」(盡心上)一章の乃ち第三條の下に於いて附記して曰く, 「此の條は係れ『語類』の説, 第八條は係れ『或問』の説」(康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』盡心章句上・九葉・「萬物皆備於我章」条), と(『四庫全書總目提要』卷三十七・經部三十七・四書類存目・「或問小註三十六卷」条)。

として康熙六十一年刻本が引用されていることからすると, ここで用いられているのは, 康熙六十一年に鄭任鑰が刊行した『朱子四書或問小註』であろう。康熙四十一年陳彝則の刊本には, ここで引用される附記はないからである。ちなみに, (二)で検討するように, 江蘇・安徽の各学校に, 鄭任鑰によってかなりの『或問小註』が配布されており, 安徽では容易に入手できたので「採進本」になったのではないだろうか。

③明代になって作られるようになる時文（八股文）の作成法に多々言及するのは、宋代から時文（八股文）は存在し、朱子もそれを善くしたからであるということも、「其の偏執 殆ど與に辨ずるに足らず」。

④『四書大全』における引用は、『朱子四書或問小註』からのものがあると言うことに対しては、『中庸』の「其至矣乎」（第三章）一節・「道之不行也」（第四章第一節）一節の解釈は、すべて『四書大全』所載の饒魯の説の剽窃であり、「射有似乎君子」（第十四章第五節）一節は、全く『四書大全』所載の新安陳氏の剽窃であると指摘し、これなども『四書大全』が姓名を書き誤ったと強弁するというのだろうか。

⑤「萬物皆備於我矣」（盡心上）章の説明が『朱子語類』や『四書或問』からのものであるとするが、これらの議論は『四書集註』成立前の未完のものである。どうして『四書集註』成立後に作られたという『朱子四書或問小註』にこのようなことがあるのだろうか。

⑥『朱子四書或問小註』の「中庸原序」に「淳熙己酉冬十月壬申」とあるが、この年の十月には「壬申」はない。

⑦『文獻通考』に引く朱子の語に「『〔四書〕集註』 後來の改定する處多く、遂に『或問』と相い應ぜず。又た工夫の修得無し云云」とある。『或問』ですら改定する時間がなかったのに、改めて『朱子四書或問小註』を著すことができたであろうか。

⑧『直齋書錄解題』によれば、黃幹の『論語通輯』は、『或問』の「未だ盡さざるの意を發明」したものである。もし、『朱子四書或問小註』がすでに存在するならば、黃幹はどうして『論語通輯』を著述したのか。

①から④は「後序」の批判であり、⑤は「原序」の批判である。⑥は「原序」に記載される年月の不備、⑦と⑧とは『文獻通考』と『直齋書錄解題』の記述に基づく批判である。

この『四庫全書總目提要』による『朱子四書或問小註』批判は妥当なものであろう。もっとも陳彝則や鄭任鑰たちも出版前からこうした指摘ができることは

理解していたことかもしれない。それにいわゆる当時の朱子学者たちにとっては、『朱子四書或問小註』は、たとえば王懋竑のように「一笑して之を置く」（『白田草堂存稿』巻八・七葉・「題四書或問小注前」）、つまりその真贋は一見してあきらかな存在でしかなかったのであろう。ふつう、こうした受験参考書でしかない書物は、よほど内容に特徴がなければ『四庫全書總目提要』では取り上げられない。それが存目に分類されているとはいえ、取り上げられているということは、当時において一定の影響を持った書物であると認められていたと考えてもよいのではないか。そこで続いて、どうしてそのようになったのかを検討してみたい。

なお、『四庫全書總目提要』でも言及されるが、康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』について、王懋竑は次のように述べ、鄭任鑰をかばっている。

〔鄭任鑰は〕其の是の書（『朱子四書或問小註』）に於いては盡く湯友信〔字は〕景范の説を用いて、詳考に及ばず。凡そ作所の序及び諸もろの附論は皆な湯〔友信〕之を為す。先生（鄭任鑰）の筆に非ざるなり。余（王懋竑）^{おも}念うに〔王懋竑の手元に残った〕此の二百部は既に焚棄す可からず。而して又た近時の坊刻の諸講章に比べて少しく詳備すと為す。初學の士 或いは焉を取る有らん。因りて之を出すと為し、其の説を附すること此の如し。亦た此の書の刻するは先生（鄭任鑰）の意に非ず。後に之を悔やむも、改むるに及ばざるを知る。庶ねがわくは流傳の後、以て先生（鄭任鑰）の累と為らざるを。丁巳（乾隆二年〔一七三七〕）九月、寶應の王懋竑 書す（『白田草堂存稿』巻八・八葉・「題四書或問小注前」）。

鄭任鑰は、まったく湯友信の意見を用いて、詳しく考えなかった。この書の序文や附論は、すべて湯友信が行なったもので、鄭任鑰とは関係がない。ただし、この書は焼き捨てるべきではない。最近の参考書と較べていささか備わっている。初学者には利用できるであろう。ただ、この書物を出版したのは鄭任鑰の本意ではない。後には、鄭任鑰は悔やんだものの、どうしようもないことがわかっている。この書が流通してからも、鄭任鑰に累が及ばないように祈る

ばかりである、という。王懋竑は、すべては湯友信が行なったことであり、鄭任鑰には非はないと弁護しているのである。

(二)

王懋竑（字は予中、号は白田。江蘇寶應の人。康熙七年〔一六六八〕～乾隆六年〔一七四一〕。康熙五十七年〔一七一八〕戊戌科の二甲十名の進士）は、『朱子四書或問小註』について、次のような題跋を残している。

往者、康熙壬申（康熙三十一年〔一六九二〕・癸酉（康熙三十二年〔一六九三〕）の間、余（王懋竑）試を泰州に應じ、書坊中に於いて『四書或問小註』一書を見る。其の序文に以て朱子の自ら作る所と為す。余（王懋竑）一笑して之を置く。其の謬妄は蓋し辨ずるに足らず。自後（此れより以後）、書坊中に亦た復た見ざるなり。壬寅（康熙六十一年〔一七二二〕）、余（王懋竑）安慶教授と爲る。時に鄭魚門先生（鄭任鑰：康熙五十九年〔一七二〇〕三月一日～雍正元年〔一七二三〕三月二十二日在任）江南に督學たり。先生（鄭任鑰）余（王懋竑）が教習の師なり、未だ安慶に至らず。先ず使を遣りて書四百部を以て余に貽り、各々の學中に分かつを命ず。余（王懋竑）之を發視するに、即ち前に見る所の『〔四書〕或問小註』本なり。之が為に大いに駭き、乃ち書を作りて力めて其の謬妄を言い、流傳する可からずとす。更に使を遣りて以往（以後）に比^{いた}至り、先生（鄭任鑰）已に湖北布政使（雍正元年〔一七二四〕十二月七日～雍正四年〔一七二六〕二月十二日在任）に遷り、以て去る。遂に達するに及ばず。會たま、余（王懋竑）奉けたる詔もて京師に至らんとすれば、乃ち載書^おし以て〔任地より〕歸る。余（王懋竑）京に至り^{わづ}廬（廬）かに四月に比^おびて、憂に遭い、又た重ねるに病を以て、倉卒擾擾（忙しくてごたごたする）として復た先生（鄭任鑰）と相い聞せず。越えて四・五載、余（王懋竑）官を罷めて家居す。先生（鄭任鑰）も亦た湖北巡撫を罷めて、楚中に留まる。使來りて視ゆ。余（王懋竑）乃ち更に書を具え、前書を并せて之に致す。未だ幾ばくなら

ずして、先生の令嗣長公 來過す。時、書 已に多く散失し、僅かに二百餘部を存し、將に以て之を歸さんとするに、長公 曰く、家尊（父親の鄭任鑰）君の書を得て深く湯景范（湯友信）の誤つ所と為るを悔やむ。家には尙お千百本有るも、已に閉ざして復た出さず。此れ用いる所無し。君の處に留むれば可なり、と。其の後、朋友 閒時（暇な時）に來りて數本を取りて去く。而して坊人（書籍商）亦た殘書を以て來りて易^かうる者有り（『白田草堂存稿』卷八・七葉・「題四書或問小注前」）。

王懋竑は、康熙三十一年（一六九二）・康熙三十二年（一六九三）の間に、江蘇泰州で『四書或問小註』を見て、言うまでもない贋作だとして、ほっておいた。そのうち、書店から消えて行った。後に、王懋竑が安慶府學の教授に任命されると、着任前に江南學政の鄭任鑰から、四百部の『四書或問小註』を送ってきて、學生に配布するようにといつてきた。見てみると、前に贋作だとした『四書或問小註』であった。驚いて、鄭任鑰にこの書物は偽作であり、流通させるべきでないという書簡を送った。ところが、鄭任鑰は湖北布政使（雍正元年〔一七二四〕十二月七日～雍正四年〔一七二六〕二月十二日在任）に転任したため（まず、湖南布政使：雍正元年〔一七二三〕三月二十二日～〔一七二四〕十二月七日に転任して、八ヶ月ほどで湖北布政使になる）、そのことが聞き届けられなかった。四・五年後、鄭任鑰から連絡があり、改めて『四書或問小註』についての書簡を送った。しばらくして、鄭任鑰の息子がきたので、残っている二百部をかえそうとしたところ、「父（鄭任鑰）は王懋竑の書簡を受け取り、この書物の出版を悔やんだ。家にはまだ千百部ほど残っているが、持ち出さないようにしている」という。後に、王懋竑のところに残っていた『四書或問小註』も友人や書籍商が来て、持ち帰っていった、とする。

そもそも學政の任期は、三年を期限とする。鄭任鑰は、康熙五十九年〔一七二〇〕三月一日から雍正元年〔一七二三〕三月二十二日の三年間その任にあたった。鄭任鑰の康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』序文には、

康熙六十一年、歲は壬寅の三月初一日（西曆一七二二年四月十六日）に在

り。候官の鄭任鑰 皖城の試院に書す（康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』「鄭任鑰序」・序五葉）。

とあるので、鄭任鑰は學政着任後、二年を経てからこの『朱子四書或問小註』を配布している。また、王懋竑の「皇清勅授文林郎翰林院編脩先考王公府君行狀」によると、王懋竑が安慶府學の教授に任命されたのが、辛丑の冬（康熙六十年〔一七二一〕）であり、着任したのが、壬寅（康熙六十一年〔一七二二〕）八月六日（「皇清勅授文林郎翰林院編脩先考王公府君行狀」『白田草堂存稿』所収による・五葉）とある。

〔王懋竑は〕未だ安慶に至らず。先ず使を遣りて書四百部を以て余（王懋竑）に^{おく}貽り、各々の學中に分かつを命ず（『白田草堂存稿』卷八・七葉・「題四書或問小注前」）。

この王懋竑の言い方からすると、康熙六十一年〔一七二二〕三月一日から八月六日までの間に、『朱子四書或問小註』は、安慶府學に送り届けられ、附属する各県學に配布するように命ぜられたようである。

嘉慶『欽定學政全書』（卷七十・安徽學額・一葉）によると、安慶府學には、懷寧縣學・桐城縣學・潛山縣學・太湖縣學・宿松縣學・望江縣學の六つの縣學が属しており、生員の定数は次のようになっている。

安慶府學 額進二十五名、廩生四十名、增生四十名、

懷寧縣學 額進二十五名、廩生二十名、增生二十名

桐城縣學 額進二十五名、廩生二十名、增生二十名

潛山縣學 額進二十名、廩生二十名、增生二十名

太湖縣學 額進二十名、廩生二十名、增生二十名

宿松縣學 額進二十名、廩生二十名、增生二十名

望江縣學 額進十六名、廩生二十名、增生二十名

額進は、院試のたびに採用すべき生員の定額であり、またこれは嘉慶『欽定學政全書』の規定であるので、康熙六十一年当時の生員数ははっきりしない。が、四百部が届けられたということは、生員全員に一部ずつ配布するように求めた

のであろうか。

そもそも學政は、科擧の受験資格を得る生員となる試験を統括することから、担当地域の学問を変化させるほどの権威を持っていた。たとえば、後のことであるが錢大昕（字は曉徵，一の字は及之，号は辛楣，また竹汀居士と号す。江蘇嘉定の人。雍正六年〔一七二八年〕～嘉慶九年十月二十日〔一八〇四〕。乾隆十九年〔一七五四年〕甲戌科二甲四十名の進士）の『錢辛楣先生年譜』には、次のようにある。

廣東學政の任に在りて、月課の令を申嚴（厳格に施行する）にし、毎季^{みず}親から出題し、教職に課卷を申解（送り届ける）して院に至るを委ぬ。〔そして、錢大昕〕^{みず}親から閱て之を甲乙す。士子 敢て托故（いいわけ）して課に與からざる者無し。肇慶・羅定・韶州の三屬を按試（巡回して試験する）し、生童の卷 千に盈ち萬に累するも、皆な親から閱るに由る。又た以えらく士子多く冒（肯）て經を讀まず、考試の毎に、經題 務めて熟擬を避く。四書藝 觀る可しと雖も、經義 違失する者は、之を痛斥し、仍お某某の卷と榜示し、經を荒らすを以て之を遺落すとす。故に是れより諸郡風を聞きて、童子 皆な全經を讀むを知る……（咸豐十年『錢辛楣先生年譜』・二十四葉・「〔乾隆〕四十年乙未 年四十八歳」条）。

錢大昕が乾隆四十年に廣東學政に任ぜられた時、自ら生員の答案を添削し、そのことを通して、廣東の学風を変化させたというのである。

それに対して鄭任鑰は、書物を配って学風を変化させた。江南學政離任直前に、各学校を通して『朱子四書或問小註』を配布したということは、この書物に書いてある解釈を基準に八股文を書けという指示であったのだろう。江南（江蘇・安徽）の学校試受験者や生員は、學政の命令だから、すぐにこの指示に従ったのではないか。こうして、すくなくとも江南（江蘇・安徽）地域では、『朱子四書或問小註』の影響が続いたと考えられる。王懋竑が、

皆な嘗て其の『文集』・『語類』を刪併するを徧覽するに、『〔四書〕輯釋』・『〔四書〕大全』に較べて稍や勝れりと為す。而して諸家の説に於いては頗

る能く其の得失を辨ず(『白田草堂存稿』巻八・七葉・「題四書或問小注前」)。と言うように、朱子の著作ということを除いては、受験参考書としてはなかなかすぐれたものであったこともその理由として考えられる。

では、八股文作成に対する影響は、どのようなものであったのだろうか。

(三)

王步青(字は罕皆、号は已山。江蘇金壇の人。康熙十一年〔一六七二〕～乾隆十六年〔一七五一〕。雍正元年〔一七二三年〕癸卯恩科三甲八十六名の進士)は、「近時の講章の中では、尙お較や切實と爲す」(『四庫全書總目提要』卷三十七・經部三十七・四書類存目・「四書本義匯參四十五卷」条)といわれる受験参考書の『四書本義匯參』(乾隆十年〔一七四五〕自序)を書くにあたって、『朱子四書或問小註』を利用している。そして、朱子の著作でないという批判に対して、王步青は、『四書本義匯參』發凡で、次のように述べている。

一 『[朱子四書] 或問小註』は、世 或いは疑いて贗本と爲して、『朱子年譜』未だ 此の書名有らず、其の原序四篇は『文集』中に亦た有ること無きなり、且つ載せる所の語は頗る或いは後人の説と相い同じなれば、當に是れ後來の竄(あらた)め集成するの書なるべし、と謂うなり。其の之を崇信する者は、⁽⁸⁾則ち是の書は淳熙己酉(一一八九年)に成り、朱子の年 已

(8)「其の之を崇信する者」の前半部分は、鄭任鑰の『朱子四書或問小註』序文に次のようにあるのを踏まえているようである。

……『或問小注』一書は、淳熙己酉(一一八九年)秋冬に成る。是の時、朱子は年 已に六十なり。『章句集注』・『或問』の外、學者の爲に一つの小注脚を添え、數月の間に舊きを訂し新しきを増し、數十萬言を襲積(積み重ねる)し、天理斯に爛熟し極まれりと爲す。今、試みに『精義』・『或問』・『文集』・『語類』を取り、相い將に對勘(対照比較)せんとするに、其の同じき者は半ば、同じからざる者も半ばなり。之を總じて親しく整頓を加うるに、直ちに孔[子]・曾[子]・[子]思・孟[子]と一鼻息を同じくす。學に出入する者、深く理窟を探らんと欲するに、是の書を舍けば、何を以てせんや(康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』序一葉～序三葉)。

すると、ここで「前輩 亦た嘗て極めて之を論ず」というのは、この鄭任鑰の『朱子四書或問小註』序文を指しているのかもしれない。

に六十なり。『[四書] 章句集註』・『[四書] 或問』の外、學ぶ者の爲に一つの
小註脚を添え、舊きを訂し新しきを増し、天理爛熟にして、^{あき}的らかに疑
う可きもの無く、其の後人と相い同じき者は、焉んぞ知らん後人の偶々成
語を用い、未だ來處を注明するを爲さざるに非ざるをや、と謂う。前輩
亦た嘗て極めて之を論ず。愚 按ずるに書中の舊説を刪定する處は頗る苟
然（いいかげん）に非ざるなり。増す所の新義は儘く『[四書] 章句集註』
と相い發明する者有り。集中も亦た概して増入すと爲す。眞贋は且らく置
きて論ずること勿れ（乾隆十年自序『四書本義匯參』發凡・六葉）。

『朱子四書或問小註』については、疑って偽書と考える人もいる。また、尊重
する人は明らかに疑うべきものはなく、『朱子四書或問小註』の意見が後人の
ものと同じという批判については、後人が引用したことを明記しなかったから
ではないかという。そして、王步青は、『朱子四書或問小註』における旧説の
刪定はいいかげんになされたものではなく、増補された意見は、すべて『四書
章句集註』と明らかにしあうものである。そして眞贋については、しばらく保
留しておく、というのである。つまり、眞贋はさておき、内容が適切であるの
で『朱子四書或問小註』を利用したと釈明する。『四書本義匯參』は、受験参
考書としてよく利用されたようで、受験生は間接的に『朱子四書或問小註』の
説を学んだといえる。

なお、王步青は、江蘇金壇の人で、康熙五十三年（一七一四）に舉人とな
り、雍正元年（一七二三年）に進士に及第する。舉人として會試・殿試受験の
準備をしていた時期に、王步青の故郷では鄭任鑰が江南學政の任にあった。す
ると、鄭任鑰が『朱子四書或問小註』を推奨していたのを、王步青は実見して
いたと考えることもできるのではないだろうか。

これに対して、『四庫全書總目提要』は、『四書本義匯參』が『朱子四書或問
小註』を利用していることを次のように批判する。

……贋本『[朱子] 四書或問小註』に至りては、明らかに其の朱子に依託
するを知りて、意有りて模稜（曖昧にする）す。殆んど其の偽を一斥すれ

ば、即ち朱子の名に假りて衆論を鉗伏する能わざるを慮る。故に存して疑案と爲し、顯言するを欲せず。其の説の取る可きは、必ずしも贋本を以て之を廢せざるを知らず。其の書 眞に非ざるも、亦た必ずしも其の説の取る可きを以て併せて其の贋本を諱まず、是是非非として、當に其の書を以て斷を爲すべし。必ずしも定めて其の書をして朱子に出でしめ、而して後に之を是と謂わざるなり。是れ又た門戸の見の未だ能く盡く化せざるなり（『四庫全書總目提要』卷三十七・經部三十七・四書類存目・「四書本義匯參四十五卷」条）。

『朱子四書或問小註』を贋作だと分かっているながらも、それを認めてしまうと、朱子の著作という権威でもって他の議論を押さえ込むことができなくなってしまう。そのため、朱子の著というのは、疑わしいとのみいう。ただ、その有用な議論は、贋作であったにせよ、否定すべきではない。内容に基づいて取捨すべきである。朱子の説だから正しいというべきではない。これは、門戸の見の範疇から抜け出していないものである、という。

こうした指摘は、きわめて当を得たものであろう。ただ、『四庫全書總目提要』は、武英殿版のものが乾隆五十四年（一七八九）年に、また阮元の刊行したものが乾隆六十年（一七九五）であり、すべて王歩青没後のことである。

では、具体的にはどうであったのだろうか。次の『孟子』盡心下の末章の解釈を検討してみたい。

孟子曰、由堯・舜至於湯、五百有餘歲。若禹・皐陶、則見而知之、若湯、則聞而知之。由湯至於文王、五百有餘歲。若伊尹・萊朱、則見而知之、若文王、則聞而知之。由文王至於孔子、五百有餘歲。若太公望・散宜生、則見而知之、若孔子、則聞而知之。由孔子而來、至於今、百有餘歲。去聖人之世、若此其未遠也。近聖人之居、若此其甚也。然而無有乎爾、則亦無有乎爾。

この章について、八股文を書く時、最も問題になるのは、孟子は「見知」・「聞知」のどちらに重点が置かれていたのかである（詳しくは拙稿「明代初期の

八股文について (9)・經濟理論第 348 号参照)。

『朱子四書或問小註』では、

……道統 繩繩として相い續きて絶えざるは、實に時を同じくするの「見て之を知る」者の之を先に知るに頼る。而して世を異にしての「聞きて之を知る」者は以て之を後に知るを得るのみ…… (康熙四十一年刻『朱子或問小註』孟子卷十四・盡心章句下・二十一葉・「由堯舜至章」条／康熙六十一年刻『朱子或問小註』盡心章句下・二十葉・「由堯舜至章」条)。

とある。また徐方廣の増註に、

通章 總じて「見知」を重んず。是れ孟子の自任する處なり…… (康熙四十一年刻『朱子四書或問小註』卷十四・二十二葉・「由堯舜至章」条)。

とあるように、「見知」を重んじていた。

これについて何如濤 (廣東南海の人。雍正十一年癸丑科〔一七三三〕三甲二十六名の進士) は、『四書講義自得錄』 (乾隆二十五年 (一七六〇) 序) で、次のように述べる。

愚 [以下のように] 按ず。此の章 時説は「見知」を側重 (偏重) せざるは無し。前面に「見知」の人有るに非ざれば、後の人は如何に之を聞く、と謂うなり。其の説は『[朱子] 語類』 (『朱子語類』卷六十一・孟子十一・盡心下・「由堯舜至於湯章」条) に引く三山の林少穎 (林之奇) の説①及び『[朱子四書] 或問小註』に本づく。然れども竊かに謂えらく……其の理 固より已に通じ難し…… (『四書自得錄』下孟自得錄卷之十・五十葉～五十一葉・「由堯舜至於湯章」条)。

① [『孟子』の] 「然而無有乎爾、則亦無有乎爾」を問う。曰く、惟だ三山の林少穎 (林之奇) 某に向 (対) して説き得て最も好し。『孟子』の] 「若禹・皐陶、則見而知之、若湯、則聞而知之」は、蓋し曰く、若し前面に「見て知る」を得るに非ざれば、後の人 如何に「聞きて之を知」らん、と。孟子は孔子の世を去ること此の若く其れ未だ遠からず、聖人の居に近きこと此の若く其れ近し。然り而して已に

「見て之を知る」者有る無ければ、則ち五百歳の後、豈に復た「聞きて之を知る」者有らんか、と。去偽（『朱子語類』巻六十一・孟子十一・盡心下・「由堯舜至於湯章」条）。

「見知」を重視するのは『朱子語類』に引く三山の林之奇の説と『朱子四書或問小註』によっているが、それは通じないと批判する。

「見知」を重んじているのは、『朱子語類』所引の林之奇の説と『朱子四書或問小註』とに基づいているという。おそらく『朱子語類』所引の林之奇の説を『朱子四書或問小註』が利用したのであろう。しかし、何如滢によるとこの時期の人たちは林之奇の説と『朱子四書或問小註』とが「見知」を重んじる解釈のもととなっていると認識していた。

劉嗣固（字は正夫。江西弋陽の人）は、康熙四十九年〔一七一〇〕序・乾隆十一年〔一七四六〕増訂『纂補四書大全』は、『朱子四書或問小註』などの基となった説には言及しないが、「見知」を重視することを批判する。

……〔「見知」・「聞知」の〕語 固より平列す。「見知」・「聞知」〔の二つとも〕總じて必ず有り、無きに非ずと謂うなり。「見知」を側重（偏重）する者は、是に非ず、と（康熙四十九年〔一七一〇〕序・乾隆十一年〔一七四六〕増訂『纂補四書大全』下孟・卷二十・九十四葉～九十五葉・「孟子曰、由堯・舜至於湯、五百有餘歲。若禹・皐陶、則見而知之、若湯、則聞而知之」条）。

また、清の乾隆三十五年〔一七七〇〕に刊行され八股文作成の教科書としてよく利用された『四書題鏡』も、次のように言う。

人 下節の「則亦無有」句に因りて、遂に預め上の三節を將^もって、亦た「見知」を側重（偏重）す。〔しかし〕上の三節は只だ閑閑に叙述し、並びに「聞知」は「見知」に由るの意無し。一たび「見知」を重んずれば便ち平叙の語氣を碍^{さまた}ぐ……（『四書題鏡』下孟・盡心下・二十五葉・「堯舜章」条）。

やはり「見知」を重視することを批判するのである。ここで「人」云々といっているのは、「見知」を重視する立場、林之奇や『朱子四書或問小註』の立場か

ら八股文を書くのが一般的であったのだろう。すると、『四書自得録』・『纂補四書大全』・『四書題鏡』などでは批判されるが、林之奇や『朱子四書或問小註』の解釈は、乾隆年間における一般的な理解であったといえるのではないだろうか。

おわりに

王懋竑は、次のように言っている。

余（王懋竑） 間に之を一視するに、其の書は乃ち老學究の纂輯する所なり。蓋し〔纂輯に利用したのは〕朱子の『文集』・『語類』と『四書大全』及び『〔四書〕蒙引』（明・蔡清）・『〔四書〕存疑』（明・林希元）・『〔四書〕淺説』（明・陳琛）・『達説』・『〔四書〕説統』（明・張振淵）・『〔四書〕翼註』（明・王納諫）より以て近時の諸家の説に及ぶなり。皆な嘗て其の『文集』・『語類』を刪併するを徧覽するに、『〔四書〕輯釋』・『〔四書〕大全』に較べて稍や勝れりと為す。而して諸家の説に於いては頗る能く其の得失を辨ず。特に其の自ら『文集』・『語類』を刪改するを以て、心に安からざる所有り。〔そこで〕遂に「序文」・「與門人書」を偽撰し、朱子の自ら作るに託し、以て大いなる不韙（誤まり：『左傳』隱公十一年）の罪を免がる可しと為す。而して作偽の罪は更に甚だしきもの有るを知らず。其の謬誤に至りては已に辨を待たずして明らかなり（『白田草堂存稿』卷八・七葉～八葉・「題四書或問小注前」）。

この書は、老學究が編纂したものである。おそらく朱子の『朱子文集』・『朱子語類』などやその後の注釈書から成り立っている。ただ『朱子文集』・『朱子語類』の改削は、『四書輯釋』・『四書大全』などよりいささかすぐれている。そして、諸家の説の得失をうまく論じている。ただ、みづから『朱子文集』・『朱子語類』の改削を行なったので、心に安からざるを覚え、そこで「序文」・「與門人書」を偽作し、朱子が改削を行なったとして、自分の後ろめたさを払拭した。たが、この偽作の罪はひどいことを知らず、その誤謬も甚だしい、とい

う。『四書』注釈としての価値は認めているが、「序」と「書簡」とを偽作したことは批判するのである。

明末に『或問小註』におそらくは偽りの朱子の序と書簡とが付け加えられ、朱子の著作『朱子四書或問小註』として出版された。もしも、朱子の著作であるといわれなければ、よくまとまった八股文作成の参考書ということになっていたのであろう。ところが、朱子という権威性が付け加わり、また江南學政の鄭任鑰が「人文の淵藪なり」（康熙六十一年刻『朱子四書或問小註』序三葉）とする江南（江蘇・安徽）において配布したことで、その解釈が影響をあたえることになったのである。